

大学生における動物の生命に対する態度と行動

塗 師 斌*

Attitudes Toward Life of Animals and Behavior upon Contact with Animals in College Students

Akira NUSHI

Abstract

The purpose of this study was to investigate attitudes toward life of animals and behavior upon contact with a variety of familiar animals in college students. Subjects were 232 (86 male and 146 female) undergraduates. The results showed that there were large differences both in sex and individual in the attitudes and the behaviors. Generally female students had warmer heart to life of animals and were less touchable to the animals than male students. Moreover female students were apt to depend on someone when they faced creepy animals like cockroach, spider, centipede, wall lizard and so on.

問題と目的

われわれの身近には数え切れないほど実にさまざまな動物がいる。そしてこれらの動物は、ペット用、飼育用、食用、観賞用、実験用等として、人間とさまざまな関わりを持つ。また中には、部屋や家へ突然入ってきてわれわれを驚かす動物もいる。これらの動物はいうまでもなく生きとし生ける物すなわち生命体である。こうした動物あるいはその生命に対する人間の態度と行動には、かなり個人差があると考えられる。捨てられた犬や猫を養うために全財産を投げ出す人や、生き魚を調理できない主婦もいれば、矢ガモのような残酷なことをする人もいる。このような極端な例を挙げるまでもなく、たとえば犬やネズミ、ゴキブリ、クモ、へび、かえる等が登場する日常生活場面で、これらの動物への対応の仕方にかに大きな個人差がみられるかは、われわれの日常経験から明らかである。それでは実際に動物あるいはその生命に対する人間の態度や行動はどのように違うのか。どの程度異なるのか。どのようなパターンが存在するのか。そしてそうした個人差の背後には何らかのパーソナリティ要因あるいはその他の規定要因が考えられるのか。これらの問

*心理学教室

題を探索的に明らかにしようという問題意識を持って、この研究は企画された。このような問題に関する心理学的な先行研究は筆者が検索した範囲では存在しないので、この研究はパイロットスタディということになる。

本研究はその第一段階として、大学生における以下の3つについての実態とそれらの相互関係を男女別の観点を考慮しつつ明らかにすることを目的としている。

1. 身近な30種類の動物に対してどの程度自分の手でつかめるかという接触行動。
2. 各種の動物の生命あるいは死に関わる場面に対する態度。
3. 部屋に入ってきた各種の動物に対する対応行動。

方 法

1. 調査対象

横浜国立大学の学生232人（男性86人、女性146人）。

2. 調査時期

1996年4月。

3. 調査方法

大学の講義時間の一部を利用して集合調査を行った。調査に要した時間は約15分であった。

4. 調査内容

4種類の調査票A, B, C, Dからなる。本研究ではこの中のA, B, Cについて報告する。各調査票の内容を「資料」に示す。

イ. 調査票A（20項目）

各種の動物の生命に対する態度を調べる。先行研究がないので、全項目とも、筆者が作成した。

ロ. 調査票B（11項目）

昆虫を主とした11種類の動物が部屋に入ってきたときの対応行動を調べる。全項目、筆者が作成した。

ハ. 調査票C（30項目）

30種類の生きている動物をどの程度自分の手でつかめるかという接触行動を調べる。

5. 得点化の方法

調査票Aについては「あてはまらない」から「あてはまる」までの4段階を、それぞれ1, 2, 3, 4と得点化した。調査票Cでは、○（つかむことができる）を3, △（さわることだけならできる）を2, 無記入（つかむこともさわることもしない）を1と得点化した。調査票Bでは、それぞれの動物に対して、「気かけない（そのままにしておく）」を1, 「部屋の外へ出ていくのを待つ」を2, 「部屋の外へ誘導する」を3, 「物でつかまえて外に逃がしてやる」を4, 「手でつかまえて外に逃がしてやる」を5, 「だれかを呼んで部屋の外に逃がしてもらう」を6, 「だれかを呼んで殺してもらう」を7, 「物や薬を使って自分が殺す」を8, 「自分の手を使って殺す」を9と得点化した。

結果と考察

1. 動物に対する自分の手による接触行動（接触可能度）について

調査票Cの30種類の動物に対する人間の接触行動として、自分の手で「つかむことができる」か、「さわることだけならできる」か、あるいは「つかむこともさわることもしない」という大きく3通りあるいは3段階の行動を考えることができる。これらの行動はこの順序で動物への接触の可能性（以後、接触可能度とよぶ）が小さくなることを表すと考えられるので、それぞれ3, 2, 1と得点化して、得点の高い方が接触可能度がより高いことを表すようにした。

接触可能度は、動物の種類によって当然異なるであろう。また一般的に考えて、男性と女性によっても異なるであろう。そこで最初に、30種類の動物別、男女別に接触可能度の比較検討を行った。結果を表1に示す。

表1 調査票Cの動物に対する接触可能度

	男 性		女 性		有意性
	平均	s.d	平均	s.d	
バッタ	2.79	0.53	2.34	0.86	***
コオロギ	2.66	0.66	2.11	0.93	***
せみ	2.60	0.76	1.99	0.91	***
とんぼ	2.80	0.53	2.34	0.88	***
ちょう	2.60	0.76	2.01	0.90	***
くわがた	2.88	0.39	2.42	0.81	***
あおむし	1.78	0.87	1.38	0.66	***
あり	2.78	0.54	2.58	0.77	*
だんご虫	2.69	0.67	2.29	0.92	***
小さいクモ	1.73	0.87	1.39	0.76	**
ゴキブリ	1.10	0.31	1.02	0.18	*
かえる	2.36	0.87	1.80	0.89	***
とかげ	2.17	0.94	1.58	0.84	***
ミミズ	2.05	0.94	1.49	0.78	***
大きいクモ	1.27	0.56	1.06	0.29	**
やもり	1.74	0.90	1.42	0.73	**
へび	1.62	0.83	1.43	0.71	+
ナメクジ	1.51	0.73	1.24	0.56	**
かたつむり	2.63	0.70	2.43	0.79	+
やどかり	2.74	0.64	2.32	0.91	***
小さいかめ	2.87	0.43	2.68	0.63	**
ドジョウ	2.40	0.83	1.92	0.92	***
ざりがに	2.71	0.65	2.18	0.92	***
きんぎょ	2.60	0.72	2.29	0.87	**
ひよこ	2.87	0.40	2.77	0.57	
アヒル	2.56	0.71	2.49	0.75	
ハムスター	2.73	0.60	2.75	0.59	
うさぎ	2.72	0.61	2.83	0.48	
ねこ	2.85	0.39	2.82	0.47	
いぬ	2.85	0.39	2.86	0.42	

(*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, +p<0.10)

この結果から、全体的にみて動物の種類による差も、男女差も非常に大きいことがわかる。哺乳類と鳥類以外の他の動物のほとんどにはかなり顕著な男女差が認められる。主要な結果を箇条書きでまとめると、以下の通りである。

①いぬ、ねこ、うさぎ、ハムスター、ひよこ、アヒル等の哺乳類や鳥類は、男女ともに他の動物に比べて接触可能性が非常に高く、男女間で有意差もみられない。これらの動物はいずれも代表的なペットであるから、この結果は当然であろう。

②男女ともに接触可能性が最も低いのはゴキブリ、ついで大きいクモである。いずれも男女間に有意差がみられるが、男女ともにさわられる人は、「危険のない場合」としているにもかかわらず非常に少ない。特に女性ではほとんど皆無である。なお、小さいクモは大きいクモほどではないにしても、やはり男女とも接触可能性が低い。

③昆虫類のバッタ、コオロギ、せみ、とんぼ、ちょう、くわがた、あり、だんご虫については、女性の方が男性より有意に接触可能性が低い。なお、男性ではこれらの昆虫類は哺乳類や鳥類と同じくらい接触可能性が高い。これは幼児期や児童期の遊び等を通して、一般に男性の方が女性より昆虫との接触頻度が高いことによるものと考えられる。また同じ昆虫類でもあおむしの接触可能性が男女ともに飛びぬけて低くなっているのは、その独特な形態によるものであろう。

④同じ軟体動物であるにもかかわらず、ナメクジはかたつむりより接触可能性はるかに低い。かたつむりの接触可能性は哺乳類や鳥類とほぼ同程度であるのに対して、ナメクジは男女ともに、ゴキブリ、大きいクモについて接触可能性が低い。これはナメクジのヌルヌルして粘っこい触感が大きく作用しているためと考えられる。その点、かたつむりは殻をつかむので、抵抗感がないのであろう。

⑤爬虫類のへび、やもり、とかげは、男子のとかげを除けば、男女ともに接触可能性が比較的低い。これは爬虫類独特のグロテスクな形態によるものと考えられる。

2. 各種の動物の生命に対する態度

調査票Aの20項目について、まず因子分析を行った。第1固有値は5.10で、全分散の25.5%を説明していた。第2固有値、第3固有値の説明率がそれぞれ8.0%、7.3%であることを考えると、かなり1次元性が高い結果である。すなわち、動物の生命に対する態度は、動物の種類を問わずある程度一貫性があるといえよう。回転前の第一因子負荷が0.3未満の項目は、項目14(野良猫)と15(野犬)だけである。犬と猫は家庭動物として人間に最も身近な動物であることから、他の動物に対する態度とは異質であると考えられる。

因子数を3としてバリマックス回転を行った結果が表2である。第1因子は項目2、4、5、9、13の負荷が高いことから、「死に直面した動物に対する態度」を表すと解釈される。第2因子は項目1、7、10、11の負荷が高いことから、「動物保護に対する態度」と命名した。第3因子は項目18、19、20の負荷が高いことから、「実験用動物に対する態度」と命名した。

表2 調査票Aのバリマックス回転の結果

項目番号	第1因子	第2因子	第3因子	項目番号	第1因子	第2因子	第3因子
1	-0.20	-0.51	-0.07	11	0.17	0.38	0.21
2	0.61	0.16	0.10	12	0.25	0.34	0.19
3	-0.37	-0.31	-0.18	13	0.51	0.28	0.24
4	0.77	-0.08	0.07	14	0.03	-0.38	0.01
5	0.58	0.20	0.22	15	-0.08	-0.34	-0.06
6	-0.06	-0.10	-0.10	16	0.25	0.22	0.27
7	0.29	0.66	0.07	17	0.08	0.37	0.26
8	-0.31	-0.13	-0.16	18	0.20	0.05	0.79
9	0.39	0.38	0.20	19	0.13	0.10	0.73
10	0.10	0.54	0.30	20	0.22	0.20	0.45

調査票Aの20項目のそれぞれにおける男女差は表3の通りである。項目14や15等を除く14項目で有意差がみられる。平均の差が最も大きいのは、項目5（平均差0.97）ついで項目4（0.88）で、これらはいずれも上記の第1因子の項目である。同じ第1因子の項目の2と9も、それぞれ4番目と5番目に平均差が大きい。以上のことから、死に直面した動物に対する態度は男女差が大きく、女性の方がそうした残酷な場面を男性よりも避ける傾向が強いことがわかる。これらに次いで男女差が大きいのは、上記の第2因子に含まれる項目1, 7, 10, 11で、女性の方が男性よりも「動物保護」の傾向が強いことが分かる。上記の第3因子に含まれる項目については、項目19と20で5%水準の有意差はみられるものの、平均差は第1因子や第2因子に含まれる項目ほど大きくはない。

表3 調査票Aの各項目の平均値

項目番号	男 性		女 性		有意性
	平均	s.d	平均	s.d	
1	2.43	1.05	1.93	0.71	***
2	2.93	1.10	3.50	0.84	***
3	1.91	1.18	1.25	0.64	***
4	1.62	0.86	2.50	1.17	***
5	2.21	0.98	3.18	0.84	***
6	1.35	0.75	1.22	0.68	
7	2.53	1.00	3.00	0.74	***
8	1.67	1.03	1.50	0.84	
9	1.59	0.89	2.14	1.05	***
10	2.74	0.97	3.18	0.77	***
11	3.10	0.95	3.53	0.71	***
12	2.14	0.97	2.68	0.96	***
13	1.98	1.15	2.32	1.11	*
14	2.09	0.99	2.06	0.98	
15	1.94	0.87	1.82	0.81	
16	1.51	0.78	1.73	0.80	*
17	3.00	1.04	3.15	0.87	
18	2.55	1.04	2.76	0.90	
19	2.40	0.92	2.72	0.98	*
20	3.07	0.91	3.32	0.80	*

(*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, +p<0.10)

3. 動物に対する接触行動と生命に対する態度との関連

調査票Cの30種類の動物に対する接触行動と、調査票Aの動物の生命に対する態度とはどのような関係があるのでしょうか。これを調べるために、まず各被験者について調査票Cの30種類の動物に対する評定値を合計してこれを「接触可能度得点」（得点可能範囲30～90）とし、その上位群と下位群の間で、調査票Aの各項目の平均値の差の検定を行った。男女差を考慮し、これらの分析は男女別に行った。

男性では、接触可能度得点の最高は88点、最低は43点であった。上位群として81点から88点までの21人、下位群として43点から63点までの20人を抽出し、調査票Aの平均値の差を検討した。その結果が表4である。項目2と13では有意な傾向（10%水準）がみられるが、その他のすべての項目では有意差がみられない。しかし有意ではないにしても、平均差の大きい項目（0.4以上）は、項目1, 2, 3, 4, 5, 13, 14で、この中に表2の第1因子の項目が4項目（項目2, 4, 5, 13）も含まれている。このことから、男性の動物に対する接触可能度は、「死に直面した動物に対する態度」と関連があるといえよう。すなわち、各種の動物をあまり触ることができない人は、死に直面した動物の残酷な場面を避けようとする傾向が強いといえよう。

表4 男性の上位群と下位群における調査票Aの各項目の平均

項目番号	上位群		下位群		有意性
	平均	s.d	平均	s.d	
1	2.76	1.18	2.30	1.08	
2	2.48	1.17	3.15	1.18	+
3	2.52	1.40	1.90	1.25	
4	1.38	0.92	1.90	1.07	
5	2.10	1.14	2.50	1.00	
6	1.62	1.07	1.40	0.75	
7	2.52	1.17	2.45	1.00	
8	1.95	1.28	1.90	1.25	
9	1.62	0.92	1.65	0.99	
10	2.62	1.12	2.85	1.04	
11	3.24	0.83	3.05	1.23	
12	2.14	1.11	2.10	0.97	
13	1.67	0.97	2.40	1.39	+
14	1.71	0.90	2.20	1.06	
15	1.90	1.04	2.25	0.91	
16	1.29	0.56	1.65	0.99	
17	3.05	1.12	3.15	1.14	
18	2.48	1.12	2.55	1.05	
19	2.48	1.03	2.30	0.87	
20	2.86	1.06	3.00	0.86	

(+p<0.10)

女性では、接触可能度得点の最高は85点、最低は34点であった。上位群として75点から85点までの27人、下位群として34点から49点までの26人を抽出し、調査票Aの平均値

の差を検討した。その結果が表5である。5%以下の水準で有意差の見られたのは、項目2, 4, 5, 8で、この中に第1因子の項目が3項目(項目2, 4, 5)も含まれている。また項目8も、表2から明らかなように、第1因子で-0.3の負荷を示している項目である。したがって女性の動物に対する接触可能度は「死に直面した動物に対する態度」と関係が強く、男性と同様、各種の動物をあまり触ることができない人は、動物の死に直面した場面を回避しようとする傾向が強いといえよう。項目14は有意な傾向(10%水準)がみられたが、この項目は男性でも平均差が大きい(0.49)。男女とも、動物を触ることのできる人の方が「野良猫に餌を与えるべきではない」に対してより「あてはまらない」としている。これは、動物を触ることができる人の方が一般により動物好きであることによるものと考えられる。

表5 女性の上位群と下位群における調査票Aの各項目の平均

項目番号	上位群		下位群		有意性
	平均	s.d	平均	s.d	
1	2.04	0.81	1.88	0.77	
2	3.15	1.06	3.77	0.59	*
3	1.41	0.89	1.15	0.54	
4	1.93	1.04	3.31	1.05	***
5	2.96	1.02	3.65	0.56	**
6	1.33	0.88	1.19	0.63	
7	3.04	0.65	2.88	0.95	
8	1.89	1.05	1.23	0.71	**
9	2.15	1.10	2.27	1.25	
10	3.26	0.90	3.23	0.86	
11	3.67	0.48	3.50	0.86	
12	2.52	0.85	2.58	1.10	
13	2.33	1.11	2.38	1.33	
14	1.85	0.91	2.46	1.27	+
15	1.85	0.77	1.73	0.92	
16	1.52	0.64	1.73	1.00	
17	3.22	0.75	3.19	1.02	
18	2.59	0.89	2.92	0.89	
19	2.59	1.19	2.77	1.11	
20	3.11	0.93	3.38	0.80	

(*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, +p<0.10)

4. 部屋に入ってきた各種の動物に対する対応行動

調査票Bの11種類の動物が部屋に入ってきたときの、9種類の対応行動のパーセントを男女別に示したのが表6(男性)と表7(女性)である。全体的にみて、動物の種類、性別、個人により対応行動はかなり異なっていることがわかるが、表からうかがえる特長的な傾向として以下のことが挙げられよう。

表6 部屋に入ってきた動物への対応行動(男性)

	あ り	小 さい クモ	大 き い クモ	コ オ ロ ギ	ゴ キ ブ リ	だ ん ご 虫	ム カ デ	は え	が	か	や も り
気にかけない(そのままにしておく)	7	19	4	5	1	5	0	6	1	4	6
部屋の外へ出ていくのを待つ	2	6	2	4	0	0	2	9	6	1	6
部屋の外へ誘導する	12	12	31	28	12	11	19	30	54	1	42
物でつかまえて外に逃がしてやる	14	22	28	23	4	27	27	2	9	0	27
手でつかまえて外に逃がしてやる	31	19	5	37	0	52	1	1	2	0	15
誰かを呼んで部屋の外に逃がしてもらう	1	1	4	2	0	0	1	0	0	0	4
誰かを呼んで殺してもらう	0	0	5	0	8	0	11	0	1	0	0
物や薬を使って自分が殺す	13	14	16	0	62	5	31	44	21	17	0
自分の手を使って殺す	20	8	6	1	14	1	8	7	6	77	1

表7 部屋に入ってきた動物への対応行動(女性)

	あ り	小 さい クモ	大 き い クモ	コ オ ロ ギ	ゴ キ ブ リ	だ ん ご 虫	ム カ デ	は え	が	か	や も り
気にかけない(そのままにしておく)	12	19	1	1	1	3	1	3	2	2	9
部屋の外へ出ていくのを待つ	6	7	7	3	3	2	3	12	11	1	10
部屋の外へ誘導する	20	13	17	28	3	14	12	41	45	1	25
物でつかまえて外に逃がしてやる	16	25	18	32	1	28	13	2	6	1	8
手でつかまえて外に逃がしてやる	22	7	1	16	0	42	2	0	1	0	6
誰かを呼んで部屋の外に逃がしてもらう	1	6	30	19	5	7	23	3	14	1	38
誰かを呼んで殺してもらう	1	6	16	1	46	1	30	3	8	2	3
物や薬を使って自分が殺す	14	14	8	0	38	2	14	33	13	13	1
自分の手を使って殺す	8	4	1	1	3	1	2	3	1	79	0

①男女ともに対応行動の一致度が最も高いのは、「か」に対する「自分の手を使って殺す」(男77%, 女79%)である。「か」は人間の血を吸う等の害を与えるので、殺すことに対して同情の余地がないのであろう。「物や薬を使って自分が殺す」を含めると男女とも90%を超える。「が」に対する対応行動も一致度が高く、男女ともに「部屋の外へ誘導する」(男54%, 女45%)割合が多い。「が」にさわりたくないという気持ちと、比較的外に誘導しやすい動物であることによるのであろう。

②男女間で対応行動が非常に異なる動物として、ゴキブリ、大きいクモ、ムカデ、やもりが挙げられる。主要な相違点は、これらの動物に対して男性では自分で対応するのに対して、女性ではだれかを呼んで対応してもらうことである。ゴキブリでは、「物や薬を使って自分が殺す」割合が、男62%、女38%であるのに対して、「だれかを呼んで殺してもらう」割合は、男性が8%、女性が46%である。また、「だれかを呼んで殺してもらう」と「だれかを呼んで部屋の外に逃がしてもらう」を合わせた割合で見ると、ありと「か」を除く他のすべての動物で男女差がみられるが、特に差が大きい動物として、大きいクモ(男9%、女46%)、ムカデ(男12%、女53%)、やもり(男4%、女41%)が挙げられる。これらの動物は、一般に人間に対して他の動物より不気味・グロテスク・危険等といった印象を与えるが、このような動物に対して女性は男性よりも依存性が強いと考えられる。

③男女間で対応行動が比較的類似している動物として、あり、だんご虫、はえ、「か」、を挙げることができる。これらの動物は②で挙げた動物のように特に不気味な印象を与えることは少ないので、男女差が見られないと考えられる。

討 論

以上、動物やその生命に対する大学生の態度と行動を、手での接触可能度、生命に関わる場面に対する態度、部屋に入ってきたときの対応行動という3つの観点から、男女間の比較を交えながら調べてきた。結論的に言って、いずれにおいても男女差および個人差が非常に大きいということが言えよう。男女差が大きいということは表1、表3、表6、表7から明らかであるが、この背後には生育環境における家庭的要因、文化的要因、社会的要因の影響が当然考えられよう。とりわけそこでの性役割観の影響が大きいであろう。個人差が大きいということについても、結果と考察の3. で述べた接触可能度得点の上位群と下位群の得点差の大きさから明らかである。特に調査票Cの昆虫類の多くを「つかむ」ことができない女子大学生がかなりいた。このような個人差を規定する要因としては、男女差に関して述べた諸要因以外に、その個人の生命観、動物観、宗教観、飼育経験、自然環境そして性格等の要因が考えられよう。これらの諸関係を調べていくことは今後の課題である。なお、この論文では触れなかったが、本調査では別に性格や飼育経験等との関係も調べているが、これについては別の機会に報告したい。

資料. 調査票の内容

調 査 票 A

以下の各項目の考え方や内容が、あなたにどの程度あてはまるかを、右の4段階で教えてください。

あてはまる
ややあてはまる
あまりあてはまらない
あてはまらない

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 1. 漁場を荒らすイルカを殺すのはしかたがないと思う。 | _____ |
| 2. 生けにえの羊が首を切られる映像には目をそらす。 | _____ |
| 3. 猟銃でカモ猟を試みたい。 | _____ |
| 4. ヒョウがシカを襲う映像には目をそらす。 | _____ |
| 5. 闘牛で血を流す牛は見たくない。 | _____ |
| 6. アフリカでライオンと銃で対決してみたい。 | _____ |
| 7. 農場を荒らす野ウサギを大量に殺すのには腹が立つ。 | _____ |
| 8. 豚の屠殺(とさつ)場面を見学できるとしたら見てみたい。 | _____ |
| 9. 生き魚料理は残酷だ。 | _____ |
| 10. 食べ物不足で山から降りてきた熊の射殺はかわいそうだ。 | _____ |
| 11. 釣り針を飲み込んで死ぬ鳥の記事を読むと心が痛む。 | _____ |
| 12. くじらは捕獲すべきではない。 | _____ |
| 13. 自分が生きた魚を刺し身にするのは、かわいそうで嫌だ。 | _____ |
| 14. 野良猫に餌を与えるべきではない。 | _____ |
| 15. 野犬は捕獲して処分すべきである。 | _____ |
| 16. 釣りは魚を殺すことになるのでいやだ。 | _____ |
| 17. 動物を殺してまで毛皮のコートを作るべきではない。 | _____ |
| 18. 生物実験のカエルの解剖は残酷だ。 | _____ |
| 19. 標本にされる蝶(ちょう)はかわいそうだ。 | _____ |
| 20. 医学実験で犠牲になる犬はかわいそうだ。 | _____ |

調査票 B

次の表の動物があなたの部屋に入ってきたとしたら、あなたはどのように対応しますか。それぞれの動物に対するあなたの対応を、表の9種類の中から一つ選び、該当箇所に○をつけてください。

	あ り	小 さい クモ	大 き い クモ	コ オ ロ ギ	ゴ キ ブ リ	だ ん ご 虫	ム カ デ	は え	が	か	や も り
気にかけてない(そのままにしておく)											
部屋の外へ出ていくのを待つ											
部屋の外へ誘導する											
物でつかまえて外に逃がしてやる											
手でつかまえて外に逃がしてやる											
誰かを呼んで部屋の外に逃がしてもらう											
誰かを呼んで殺してもらう											
物や薬を使って自分が殺す											
自分の手を使って殺す											

なお「誰かを・・・」の部分は、実際の調査用紙では「だれかを・・・」とひらがなにしている)

調査票 C

次の(生きている)動物の中で、危険のない場合に、あなたが自分の手でつかむことができる動物名の番号に○, さわることだけならできる動物名の番号に△をつけてください。

- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1. バッタ | 2. コオロギ | 3. せみ | 4. とんぼ | 5. ちょう |
| 6. くわがた | 7. あおむし | 8. あり | 9. だんご虫 | 10. 小さいクモ |
| 11. ゴキブリ | 12. かえる | 13. とかげ | 14. ミミズ | 15. 大きいクモ |
| 16. やもり | 17. へび | 18. ナメクジ | 19. かたつむり | 20. やどかり |
| 21. 小さいかめ | 22. ドジョウ | 23. ざりがに | 24. きんぎょ | 25. ひよこ |
| 26. アヒル | 27. ハムスター | 28. うさぎ | 29. ねこ | 30. いぬ |